

自然災害と人々の記憶

古写本がもたらす新たな関係

西芳実

その数 400 とも 500 とも言われるアチェのイスラム塾のなかで、海外にまで名が知られているのがトゥンク・チ・タノアベ・イスラム塾である。バンダアチェ市から内陸へ 42 キロ、車で 45 分ほど行った大アチェ県スリムム郡に位置するこのイスラム塾は、スルタン・イスカンダル・ムダがアチェ王国を統べていた時代(1607-36 年)にバグダッドから来たウラマー7 兄弟の長男、フィルス・アル・バグダディが創設し、イスカンダル・サニ(1636-41 年)、タジュル・アラム(1641-75 年)と続くアチェ王国の最初の隆盛期にイスラム学修業の場として発展した。ハムザ・ファンスリやヌルディン・アルラニといった東南アジアのイスラム世界構築に多大な影響を与えたウラマーの写本をはじめ、貴重な写本を所蔵していることで知られる。

アチェ戦争の際には、オランダの攻撃を恐れた 8 代目の塾長が 1 万冊の蔵書を守るため、一部は周辺の住民に託し、残りは 7 頭の馬に乗せて 30 キロ離れたトゥレベ村の洞窟に隠したという話も残っている。塾舎はオランダの攻撃を受けて焼かれ、塾長は 1900 年にオランダの捕虜となってマナドまで流されたが、1905 年にアチェに戻され塾の再建と蔵書の回収に取り組んだという。

2002 年に私がこの塾を訪問したときは、9 代目の塾長が 450 人の塾生とタノアベ図書室を守っていた。シンガポール、マレーシア、ブルネイといった近隣諸国、インドやパキスタン、アラブ諸国、そして欧米や日本からの訪問客の名が書かれたゲストブックとアチェ州政府の協力で作られた蔵書目録を見せながら塾長が語ったのは次

のようなことだった。

ここには 400 年前からの貴重な資料があり、多くの研究者や学生がそれらを求めて来訪することは喜ばしい。だが、高名な学者と信用して貸し出してそのまま返却されなかったり、ページを抜かれて返却されたりしたことがあり、資料の利用のされ方には気を遣わざるをえない。ここで所蔵していたはずなのに自分が管理を始めたときには行方不明になっていた資料も数多い。保管場所がアチェの伝統的な木造・高床式の建物であるため、防火・防湿対策が不完全だとか不便だということで、近代的な図書室への改築や別の図書館への移転という申し出もこれまでにあったが断ってきた。改築の必要は感じているが、自分たちのやり方を受け入れてほしい。ここに寝泊りして読みたい人には資料を提供するし、そうやって論文を書いた人も多い。

所蔵する資料の価値に対する誇り、資料を求めてやってくる人々との交流の楽しさの一方で、資料が奪われてしまうのではとの猜疑心、資料を自分たちだけで守りきれぬかという不安などがなймаぜになって当惑しているとの印象を受けた。

それから 1 年とせずにアチェに軍事非常事態宣言が発令され、アチェはインドネシア人も含めて域外からの立ち入りが困難な場所になった。

*

2004 年スマトラ沖地震・津波は、タノアベ図書室を取り巻くこうした状況にどのような影響を与えただろうか。2005 年 10 月 2 日に開かれたシンポジウム「文化の記憶の喪失と回復：スマトラ島沖

地震津波災害とアチェ文化財」(文化庁・東京外国語大学)を見る限り、この未曾有の災害は日本を含む国際社会のアチェに対する一般的な関心を高め、地震津波被害にとどまらず、アチェの多様な側面に働きかける動きを促進したようだ。

国立イスラム大学(ジャカルタ)のオマン・ファトゥラフマン「アチェ写本とムスリム知識人の連鎖」は、アチェで保管されている写本が中東と東南アジアのイスラム世界を媒介したムスリム知識人の知の伝達経路を明らかにする重要な資料であるにもかかわらず、外部の研究者には利用しにくかったという問題点を指摘し、アチェで保管されている歴史文書が広く利用可能なものとなる必要性を訴えた。また、菅原由美「インドネシアの写本研究におけるアチェの写本の現状」は、オランダやイギリス、ジャカルタの図書館に収集されずに民間レベルで管理されている写本がインドネシアには多数あり、なかでもアチェについてはその重要性と比して情報収集と整理が遅れている現状を示した。

こうしたアチェ域外からの関心の寄せ方に対して、アチェから参加したアチェ州立博物館館長ヌルディン・アブドゥルラフマン「アチェと知識人の文化遺産としての古写本」は、1960年代以降、アチェの写本が人々の生活のなかで活かされる知の伝達手段としての役割を失い、(1)読めない文字で書かれた神聖な書物、(2)資料的価値の高い後世に残すべき文化遺産、(3)高額なアンティーク商品、すなわち「古」写本となってきたこと、その過程はアチェがインドネシアの一地方に区分される過程と重なっていることをまず確認した。そのうえで、思い起こすべきは古写本が生きた写本であった時代、国際都市としてアチェが発展していた時代であり、地震津波後の古写本への関

心、アチェのコスモポリタンの性質の再評価、ひいてはアチェの豊かさの再興につながりうるものとなることへの期待を表明した。

印象的だったのは、「アチェには外界に対応する十分な力があり、外から人が来てもアチェらしさを維持できる」と強調する一方で、「アチェの文化がこれ以上一部たりとも失われないことを望む」とも語ったことだ。外界からの力は借りたいが、借りることで自分たちらしさが損なわれてしまわないかという不安がそこにはあるように見えた。

不安の背景には、アチェの古文書保存が天然ガス開発の二の舞になることへの恐れがあるかもしれない。アチェにおける天然ガスの発見は、当初アチェに豊かさを保証するものとして歓迎された。しかし、採掘・精製や売買契約には高度な技術と専門知識が必要で、開発は多国籍企業、ジャカルタの国営企業、日本の商社の主導で進められた。アチェに設置された精製工場の技術スタッフはアチェ外から派遣され、アチェ人は現地雇用の事務員となるか、出入り業者として工場スタッフの生活物資納入や小規模な建設プロジェクトを担当した。工場関連施設は外国人でも快適に過ごせるように小奇麗に整備され、電気も水も無料とされたが、守衛付きのゲートと塀に囲まれ、利用できる人は限られていた。輸出の収益は中央政府の国庫に納入され、地元はどう還元するかも中央政府が決定した。こうした状況が、アチェ独立を支持する心情を強めたことは否めない。

外の人々がアチェの豊かさに意味を見出す一方で、その豊かさを自分たちが利用できなかったというアチェの人々の記憶を塗り替えることこそが、今アチェで求められているのかもしれない。